國學院大學學術情報リポジトリ

取り組みレポート

スタディツアーを通じた学生の成長の可能性：
東北再生「私大ネット36」を例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 崇義 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002112

スタディツアーを通じた学生の成長の可能性 —東北再生「私大ネット36」を例として—

鈴木 崇義

【要旨】

本稿は、筆者が実際に引率に携わった東日本大震災復興支援プロジェクトである東北再生「私大ネット36」の活動を通じて得た知見を、学生の成長という視点から述べたものである。この取組は、Actと呼ばれる3泊4日の南三陸町での合宿を実施し、被災地支援を通じてそれぞれのActを貫くテーマに沿って被災地に学ぶというものである。筆者は、平成27年9月に南三陸町に学生を引率し、そこで学生が4日間のActでそれぞれに考え、様々な意見を交換して自分たちなりの答えを出そうとする姿を目の当たりにした。復興支援はとても大きな事業であり、学生ができることは実に小さい。しかしながら、学生にしかできない取組も存在するはずであり、それを通じて学生が成長できるという実感を得た。よって、本稿では実際のActの事例を紹介し、そこから何を学生が学び得たのか、また、どのような成長の可能性があるのかについての報告である。

【キーワード】

スタディツアー 学生ボランティア活動 東日本大震災 復興支援 東北再生「私大ネット36」

1. はじめに

平成23年3月11日、東日本大震災という未曾有の大災害が日本を襲った。そのあまりにも大きな地震のために、都心の交通網は麻痺し多くの帰宅困難者が出た。また、地震によって発生した津波により、東北地方を中心とする太平洋沿岸では多くの人や町が被害を受けた。さらに、この津波の被害により福島第一原発事故が起これ、日本は核の恐怖にさらされた。

この東日本大震災は、かつてない規模の地震が起こったこと、被災地域が広範囲であったことから、復興に至る道りは険しいものとなった。震災から5年が過ぎようとしているが、未だに多くの被災者が仮設住宅等に住居し、不自由な生活を強いられている。また、震災直後から多くの有名無名の支援者がボランティア活動を行い、様々な形で支援がなされてきた。しかし、瓦礫が撤去され、支援物資が十分に届いても、そこに住む人々の暮らしは元には戻らない。さらに加えて、被災した人々の心のケアや、新たな生き甲斐の獲得といった、人に対する支援が求められるようになってきている。現在、被災地には大がかりな支援が終結していく中で、継続的な支援が求められているのである。

震災直後より、都心の私立大学を中心に大学間で連携して支援を行おうという企画が持ち上がり、それが「東北再生『私大ネット36』」として立ち上がった。

この、東北再生「私大ネット36」は、その会則「東北再生『私大ネット36』会則」の第

3条（目的）に、「本会は、東日本大震災後の東北地方（主に三陸沿岸地域）の復興にあたり、教育・研究領域が異なる加盟校が、それぞれの特徴を活かしながらゆるやかに連携し、自由で独自性のある活動を円滑に実施できる環境創出のために組織化するとともに、今後10年間の継続的な支援活動を教育的視点から実施することを目的とする。」とあるように、東日本大震災をきっかけに私立大学が集まり、東北の被災地支援と学生の教育とを目的に、平成24年春に設立したネットワークである。このネットワークは、東北再生「私大ネット36」発足当初、学生ボランティアの受け入れ先である宮城県南三陸町と大学とで協議した際、町から「学生が来てくれる以上は、ただボランティアに来るだけではなく、南三陸に学んで欲しい。」との意向が示されたことにより、復興支援ボランティアに学修の要素を取り入れた。これが、結果的に復興支援に幅広い活動の可能性を与えたと考えられる。

主な活動は、Actと称される春と夏にそれぞれ4回ずつ宮城県南三陸町で行われる3泊4日のスタディツアーである。これは、引率教員それぞれが設定する学修プログラムに沿って、復興支援のボランティア活動や学修活動を行うものである。

筆者は、平成26年3月に実施された、本学神道文化学部の黒崎浩行准教授（当時）が引率したAct3に随伴し、被災地を訪問する機会を得た。さらに平成27年9月には自身が引率者を務め、学生たちが3泊4日の間に被災者と話し災害の爪痕に触れることにより、何かを感じ、学びゆく姿を目の当たりにした。本稿は、この時の体験に基づき、学生が被災地を訪れたときの状況を報告するものである。を通して、彼らが何を学び得ることができるか、その可能性について考えるための一助としたい。

以下、平成26年3月のActおよび平成27年9月のActの概要を示すことにより、現地がどのように学生への学修プログラムを用意したのか、また、学生が被災地にいかにして学んだのかを紹介してゆく。

2. Act3「祈りの形を探る旅」（平成26年3月4日～7日）について

筆者は、このActにて黒崎准教授の設定したテーマに基づき、学生たちに交じって活動し、学生とともに考える機会を得た。以下、筆者が知り得た南三陸の課題について述べる。

(1) 現在直面している問題

震災から3年目を迎え、大きな瓦礫撤去等の支援はほぼ完了した。ところが、今度は人口の流出という新たな問題が発生した。街を離れる原因としては、震災後の高台移転が進まないことや、津波被害により学校が無くなり、子供の教育の場を求めて移転する家族が増えていることが挙げられる。一方で、現地に残った人々には南三陸町を見捨てられないという気持ちやこの場所を次世代に託したいという思いがある。こういったことから、人口減少への対策として、雇用のための会社を現地に設立し、地域に働く場所を提供している。また、今までは個人経営だった漁業も、漁師同士が協同して仕事をするようになった。

今後、南三陸町に住民を戻すためには、南三陸町をより住みよい場所としてゆく努力が必要である。

(2) 減災、そして地域の伝統と自然との共生

南三陸町には、現代的なインフラを使用しないで生活する基盤があり、行政と連絡がとれなくなっても生活できる土壌とノウハウを有している。例えば、震災直後の音信不通状態であっても、薪ストーブや井戸水を用いて生き延びたのである。こういった知恵は、子供の頃に自然の中で遊んだ経験が活かされているのである。この地域の人々は、自然の中で生きてゆくための力が元々培われてきたと考えられる。現在の課題としては、被災者が自分たちが生き延びた経験をどのように活かし、次世代に伝えていくかという課題がある。

以上の二点を考察することが、自身の引率に大いに裨益することとなり、次に述べるようなActを設定するに至ったのである。

3, Act4「復興支援の変遷をめぐって—今できること、これからやるべきことを考える—」(平成27年9月)について

続けて、筆者が引率を務めた平成27年9月のAct4について報告をしたい。本Actには、5つの大学から合計31名の学生が参加した。ここでは、学生がどのように活動し、どのように学んでいったかを引率者の視点から述べていくことにする。

【Actスケジュール】

9月1日

- 8:00 大正大学出発
- 15:00 いりやど到着
- 15:30 DVD視聴、町内視察
- 19:30 語り部講話

9月2日

- 9:00 南三陸ボランティアセンター講話
- 13:00 椿プロジェクト講話、ボランティア体験
- 19:30 まとめ

9月3日

- 9:00 復興応援団講話
- 12:00 さんさん商店街
- 13:00 ボランティア受入団体訪問、ボランティア体験
- 19:30 まとめ

9月4日

9:00 地元の方とワークショップ

13:30 いりやど出発

14:58 くりこま高原発

(1) グループワーク・ボランティア体験

本Actのテーマは、現在進行形で復興が進んでいる南三陸町に、学生や大学がどのように関わることができるのかを知りたいという思いから設定した。しかし、このテーマは、今までの復興支援の在り方について学びつつ、これからやるべき支援を考えるという、特に初めて参加する学生にとっては、難しいテーマでもあった。しかし、南三陸の将来を見据えた、さらに学生だからこそできるボランティアについて学生の視点で考えることができるため、ここに学生が食いついてくれれば、興味深い考察も生まれるのではないかと期待もあった。

南三陸町に到着して最初のグループワークは、南三陸ボランティアセンター事務局長の猪俣隆弘氏による、震災の概要や、被災したことから学んだ防災対策に関する講義を受けてのものであった。学生は、南三陸の震災直後の状況から現在に至るまで、どのような支援が求められ、また行われていたのかを知り、事前に考えてきた「これからの復興支援」との齟齬を感じていたようである。しかし、現地でボランティア活動をしていた方から直接話を聞いたインパクトは大きかったようで、そこからアイデアを出そうとしても、現在求められていることや、学生は南三陸でどのように携わることができるのかについて、なかなか具体的なイメージをつかめずにもがいていた。

その後、南三陸応援団の星野奈々氏より、これからなされるべき新しい復興支援のあり方についての活動について講義を受けた。この、南三陸応援団とは「交流」を中心とした、南三陸の魅力のPRとボランティアをセットで行う活動をしている団体である。ここでグループワークでは、前日までの緊張もほぐれ、幾分活発に意見が飛び交ったように思う。そしてその日の午後、上山八幡宮では、宮司の工藤真弓氏より、将来また襲ってくるだろう震災に備え、被災した教訓を受け継ぐための「椿プロジェクト」の話の伺い、避難経路整備のための草刈りを行った。こういった活動は、後に実施したアンケートを見ると、「当初はなぜ復興支援のためにやってきて草刈りをしなければならないのか不満であった」との意見もあり、どのような活動が復興支援に繋がるのか、また、復興支援の実感を得られるのかは、活動中は見えなかったようである。しかし、学生達は、少しずつ自分たちなりの復興支援のあり方について、輪郭を見いだしつつあった。

(2) 平成の森仮設住宅でのお茶会

東北再生「私大ネット36」では、以前よりお茶会を企画したことはあったが、当時の様子を聞くために企画されたものばかりで、地元の方々との交流そのものを目的として聞いたのは、本Actが初めてであったとのことである。

お茶会開始直後は、地元の方々と打ち解けられるのか、被災地外からやってきた学生である自分たちが受け入れられるのか、といった不安もあったようである。しかし、その不安は杞憂に終わり、学生達はめいめい肩もみをしたり、南三陸町に伝わる踊りを教えて頂くなど、積極的に住民の方々と交流をしていった。中には、一緒に近郊を散歩したり仮設住宅の中を見せていただくといった、貴重な経験をした学生もいた。

学生達はここに至って、初めて被災地にやってきて活動をしているのだという実感を得たようである。「このお茶会が、私たちの中で一番印象に残る活動だった」と多くの学生が話してくれた。

このお茶会を通して、学生達は現在の南三陸町にはコミュニティの形成とその維持が必要であると考えようになった。なぜなら、この仮設住宅というコミュニティも、やがて完成する公営住宅への引っ越しにより崩れてしまうことを知らされたからである。公営住宅は、住居としては立派であるが、現在、仮設住宅に住んでいる方は、その大半が高齢者である。こういった方々は、公営住宅にて新たにコミュニティを形成するのが難しく、孤立する高齢者が増えている事が、新たな問題となっているのである。

学生達は、このお茶会を通じて「心の拠り所となる、コミュニティの大切さ」がいかに重要であるか、という課題を見いだしたようである。平成の森仮設住宅にお住いの方からは、「支援は足りていないのは事実だが、今は人と話す機会がほしい。」「今まであった人とのつながりが、震災によって壊されてしまった。」というような話を数多く聞いていた。その他、学生一人一人がそっと胸にしまった話もあったことだろう。中には、話を聞いて住民の方のつらい思いに共感して涙を流した学生もいた。

(3) 学生からの様々な提案

ここで、学生達がグループワークで考え出した、復興支援のアイデアを紹介しよう。実現可能であるか、また、魅力的であるかの判断は置くが、これらは学生達が3泊4日の現地での体験で学んだ成果である。

ー1、ウォークラリーin入谷地区

地元の子供たちとお年寄りが1泊2日で交流を深めながら、入谷地区に関するクイズを作成し、地元の方たち主体の企画や運営がスムーズに進むよう学生がサポートをしつつ、外部の方を対象に開催する。このウォークラリーに参加することによって、参加者は入谷地区について実際に歩きながら知ることができるレクリエーションである。

ー2、私大ネット36 スタディツアーwith留学生

現在の「東北再生」私大ネット36で実施している、既存のスタディツアーを基礎として、「自然災害・防災」をテーマに掲げ、新たに留学生を加えたツアーを行うというもの。南三陸の現状を外国人にも知って頂きたい、そして外国人の視点から、復興に向けて新たな

アイデアを得ることを期待しての取り組みである。

－3、体験活動&お茶会 ～和（なごみ）の場～

これは、学生の手で運営する体験活動や、お茶会を開くという企画である。お茶会会場の近隣に住むお年寄りの方と、運営側の学生を対象に、世代を超えた交流と、震災についての学びの場を形成することを目的としている。

－4、南三陸町内小中学校 文化・伝統継承交流会

南三陸町内にある各小中学校に地元のお年寄りを招いて、南三陸町の昔話・歴史についての話を聞いたり、切子を始めとする伝統工芸を教わることにより、伝統の継承の場を作る交流会である。これは、お茶会で聞き得た「人と話す機会がほしい」という声に耳を傾けつつ、「伝統の継承」と「新たなコミュニティ形成」について重点を置いた企画である。

この各企画の意図をまとめると、1つ目は、外部主体ではなく、地域の方々と協働での企画運営を目指しているという点。2つ目は、現在求められている、「心の拠り所となるコミュニティ維持の必要性」「人とのふれあいの大切さ」というニーズに応えた新しい支援の形を構築にしようとしている点。3つ目は、震災の記憶の風化を防ぐための、語りの場を形成使用としている点。4つ目は、元気になりつつある南三陸の現状を多くの人に知ってもらうための企画という点が、学生ならではの支援の形ということができよう。言うまでも無いことだが、これは継続性がある初めて成立するものである。

以上は、筆者が引率者として復興支援に関するテーマを設定し、学生たちを南三陸まで引率したActの内容と、引率者側からみた学生たちの南三陸（被災地）に対する目差しである。では、果たして学生たちはこのActで成長をしたのであろうか。

4、アンケートや事後レポートから見える学生の成長の可能性

仮に、引率者の印象のみから発言することが許されるなら、学生は東北再生「私大ネット36」のActに参加することによって成長することができる、と言えよう。被災した方の生の声を聞くことにより見聞を広め、グループワークによって意見交換を行い、さらに3泊4日の集団生活をすれば、多少なりとも変化が現れてくるものである。また、文部科学省も学生が被災地ボランティアに参加することが社会の担い手になる自覚を促すと考え、平成23年4月1日付で「東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について」（23文科高第7号）とする通知を各国公私立大学長、各公私立短期大学長、各国公私立高等専門学校長に対して送付した。そこには、「学生が、大学等の内外において、学修成果等を活かしたボランティア活動を行うことは、将来の社会の担い手となる学生の円滑な社会への移行促進の観点から意義があるものであることから、被災地等でボランティア活動

を希望する学生が、安心してボランティア活動に参加できるよう、下記の諸点にも配慮して、引き続き学生への指導等をよろしくお願い申し上げます。」とあり、学生が被災地ボランティアに積極的に参加できるよう求めている。こういった点からも、被災地ボランティアの学修効果に対する期待は高い。

しかし、こういった取り組みが学生の成長を促進するであろう事は期待されるものの、彼らの成長を測定する明確な基準を見出すことは難しい。ここでは、学生たち自身が今回のスタディツアーを経験して成長したと実感できているか、また、いかなることを考えたかを見ることにより、「成長の可能性」について検討してみたい。以下、Act終了後に東北再生「私大ネット36」としてとったアンケート結果と、筆者が課したレポートから引用して述べてゆくことにする。

アンケートでは、問1にて「このプログラムであなたは成長できたと思いますか。理由もお聞かせ下さい。」という、学生自身に成長を感じられたかを問う項目を設けていた。この回答結果は以下の通りである。

- ①とてもそう思う → 14名
- ②まあまあ思う → 16名
- ③あまり思わない → 1名
- ④思わない → 0名

結果からは、ほとんどの学生が自分が成長できた実感を持っていることが読み取れる。そして、その理由は自由記述覧に次のように述べられている。

- ・自分の目でしっかり被災地について考えることができたことが一番大きい。他大学の人と交流を交えた中でしっかり自分の意見が言えたり、発表できたことはいい経験となった。感じる事、吸収できることが多く、参加できてよかった。
- ・普段グループワークをこの短いスパンでやることがないので、自分の意見や感じたことをグループ内や全体と共有することができたため。
- ・被災地の実情などを直接目で見て、話を聞くことが出来たため、これまで他の地域の出来事であった東日本大震災の復興について、自分にできることは何かという視点から考えることができたため。
- ・3回目の参加であったが今回は初めて自分たちがどういう支援ができるのかというものをメインに考えるプログラムであった。いろんな人たちと話をしたり聞いたりするうちに漠然としたものではなく、より現実味を帯びたものにできたと思う。

成長を実感できた理由としては、被災地に実際に赴いたという実体験と、それに基づいて復興支援について考え、議論する機会があったことを挙げている。確かに、その場所に

行って自分の目や耳で直接見聞きしたことは深く印象に残るだろうし、その場所で実際に体を動かすことにより、実感として記憶に残るのであろう。では、Act終了後に課したレポートでは、彼らはどのように述べているのであろうか。レポートの執筆要領は以下の通りである。

- ・文字数は1600字程度とし、最大で2000字までとする。
- ・内容は、今回のActに関することなら何でも良いが、たとえば仮設住宅でのお茶会でのことや、東京等の他の地域で行える支援の可能性、自分が今後いかに南三陸町と関わっていけるか等のテーマを明確に絞って述べること。
- ・内容に沿ったタイトルをつけること。タイトルは内容との齟齬がないかを重視する。

Actのテーマに沿って、もう一度自分たちが南三陸町で学んだことを振り返って欲しいという思いを込めた課題であった。以下、学生たちがそれぞれ感じ取ったこと、考えたことを学生のレポートから引用し紹介したい。

学生A

被災地の人達は「覚えている」というただそれだけのことに感謝をしてくれた。もしかしたら、その裏には震災が人々の中から薄れていくことへの不安があるのかもしれないと考えた。私達が考える支援と被災地の人達が求めている支援に少しのズレがあり、忘れないでいることこそが求められているのだと実感した。サポートをすることが良いと思っていて被災地に対して何をすれば良いのか難しいと感じていたが、「被災地の様子を見て感じる」という出来ることから始めれば良いと気付くことができた。

学生B

講話でみなさんが共通で言っていたことは、「また南三陸に来てほしい」ということだった。この言葉を、4日間の中で何度も耳にした。私は半年前にも南三陸町を訪れているのだが、その時出会った方が言っていた言葉が印象に残っている。「来てくれるだけでボランティアです」という言葉だ。震災から4年が経った。震災直後は人が多く訪れるが、段々と客足は鈍くなっていく。今後の課題として、交流人口をどう保つかが挙げられる。南三陸応援団の開設も、リピーターを増やすことが目的だったという。一度だけではなく、何度も足を運ぶこと、継続が重要なのである。

学生C

今回の活動全体を通して、話を聞いたり、グループワークをしたり、各地を見て回ったりしました。しかし、本当に南三陸のために何かできているのかということはわかりませんでした。事前研修、またその前の説明会で先生が若い人が来るだけで活気づ

くといっていたものにも本当にそうわかりませんでした。しかし終わってみて、誰かのために何かできたと思えたのは、平成の森仮設住宅でお茶会を開き、おじいちゃんやおばあちゃんたちだけでなく、私たちも全員が笑顔になっていた時でした。その時、こういうことだったのかと思い、復興支援もただ街を復興するだけでなく、人も復興していく必要があると思いました。

学生D

はじめは「ボランティアなのになんでこんなに講話が多いんだ」と思ったのが本音だが、今できるボランティアは限られていて、講話も大切なボランティアの一環だと思う。講話を学生ボランティアが聞きそれを自分の地に帰った時に周りの人に伝える。それだけでもボランティアが出来ているではないか。学生にできるボランティアは限られているというが、実際には考えれば考えるほどたくさんボランティアが出来るのだと感じた。

学生E

講話のなかのにも出たが、「伝える」という役目も今後必要な支援である。4年が経ちまだまだ落ち着きがあるわけではないが、後世に今回の震災を伝えようとする人々を4日間それぞれの立場で進めていることが見えた。私たち学生が4日間で学んだ、見たことを友達や家族に伝えていくことも風化防止につながり、南三陸のためになる。学生の立場であるとお金のかかることはなかなかできることが少ないが「伝える」ことであつたらできる。

これらは、今回のテーマであった「復興支援」について考えた内容である。震災直後の、所謂「わかりやすい」支援の時期が過ぎた今、どのような支援が被災地に求められているのか、また被災地を離れてできる支援とは何か、ということについても考えを及ぼしている。彼らは、被災地の人との交流を継続的に行うこと、被災地から戻って自分の周りの人に被災地の状況を伝えること、可能であれば何度でも被災地を訪問することが支援になることを知り、自分たちにもできるという実感を得たようである。

学生F

「防災への準備」に関して、関東に住む学生には難しい話なのかもしれないと感じた。関東で直近の震災といえば今から90年以上前の1923年に発生した関東大震災であり、当時から今でも生きている人はごく僅かだろう。対して関西では阪神淡路大震災が20年前の1995年に発生している。京都から参加していた岩井くんは関西出身ということで、自身が生まれる前に発生した阪神淡路大震災から防災の意識や震災への考え方を得て学んでいると言っていた。では関東の学生はどうだろうか。せいぜい9月1

日の防災の日に避難訓練をするくらいであり、関西の人より震災を知り、意識を高める環境が少ないだろう。このように関東と関西の間では「防災への準備」という点、震災への意識のスタート地点に差がある。

学生G

大きな自然災害が起きた際は自分と関係があるという感覚を失わない、失わせないということが大切だと感じました。

そのために私たち市民は、椿物語プロジェクトの工藤さんもおっしゃっていましたが、日頃の生活のなかで自分の地域の地形や過去にあった災害についての理解を深めていくことが必要です。

自治体としては、東日本大震災のような複合型の災害について被害規模の予測を入念に行い、マップや通達を通して住民全体の意識を維持向上させていくべきです。といってもこれでは従来と変わらない部分が多く、認識不足である現状の打破にはつながりません。

南三陸町では、町民同士の付き合いや長年の津波への警戒心の強さによって多くの命が救われました。都心部に住む私たちはこれらの代わりとして、日頃の防災対策での企業と自治体の協力関係を強めるべきだと思います。訓練日や防災講習を行う際は協力を要請し、開催されているだけで中身のない対策となることを防ぐことで、災害時の人的被害を抑えることができると考えます。

この二人の学生は、被災地で学んだ防災や減災の対策から、自分の住む町での防災について考えている。さらに、学生Fは、阪神淡路大震災を経験した関西に住む学生の意識と、東日本大震災でさほど被害を受けなかった自分とを比較して、災害の記憶の風化を実感したことを述べている学生もいた。また、学生Gは、災害対策を現在自分が学んでいる専門領域に落とし込み、自治体がどういった施策をすべきなのかについて考察をめぐらせている。

学生H

みなさん（筆者注：平成の森仮設住宅でのお茶会に参加して下さった住民の方々を指す。）に共通して感じたのがみなさんどんな震災の話でも明るくお話して下さり自分はこんな明るく話すようなことなのかととても驚きました。そして、今は南三陸の未来に向けて何ができるかと一生懸命考え前向きであることに刺激を受けました。

学生I

私が、「ここに住まわられていて、これがあったら便利だな、と思うものを、小さなことでもいいので教えて頂きたい。」とお願いをしたところ、「車」という言葉が返ってきた。「今は車がないため、この仮設にとどまるしかない。自宅があった時は、息

子たちが何かあればいろいろと車を出してくれた。そして…」といった後、「遠く離れた息子たちに会いたい、孫の成長がみたい。大好きだったあの街を返してほしい…」と涙ながらに、声を絞り出すかのように仰っていた。一瞬で自分たちの生活が一変し、会いたい人を失ったり、遠く離れてしまったりと、自分と重ね合わせて考えれば、本当に残酷で、想像遙かに超える出来事が、5年前に起こったことを、改めて確認することが出来た。涙が止まらないお話であった。

学生J

今回のお茶会を通して自分自身の無知無力が顕著に現れた。そんな自分が情けなく正直つらかった。そこで今後カウンセリングの行い方を学び再チャレンジをしたいとこの時強く感じた。正直な話今の自分には、被災地に対して行えることはないと思う。だが、この悔しい体験をもとにカウンセリングのできる宗教者になりたいと思えるきっかけになった。その夢が叶えられた時今後南三陸に対して関わっていけることなのではないかと考えている。

学生が、「被災地にやってきたのだ」、「復興支援の実感をつかめた」と意識したのは、平成の森仮設住宅での住民の皆さんとお茶会であった。これは、多くの学生が話してくれ、また提出された全てのレポートに触れていた。多くは学生Hのように、被災者がつらい思いをしているだろう、不便で困っているだろうと思っていたが、実際に被災者の方と会うと、とても明るく元気であったことに驚いていた。そういった我々外部からやってきた人間を快く受け容れてくださる態勢もあって、お茶会は非常に和やかなものとなったが、中には学生Iのように被災者の方の悲しい思いに寄り添った学生もいた。また、学生Jはこのお茶会の経験が自分の将来を考えるきっかけとなったようである。

学生K

それでも今回のツアーで町を復興させようと奮闘する人々の姿を見て、困難であっても不可能ではない、必ず良くなる、ともひそかに思った。それは町全体を形作ろうとしている行政側はもちろんだが、私が何よりも希望を感じたのは住民自らが率先して動く姿だった。遠藤さんも仰っていたが、行政ではできない部分の担い手が必要である。その一人が樁の避難路を発案した工藤さんである。樁という着眼点は南三陸町に住んでいた住民であるからこそのもので、外部の人間には決してないものだ。私ならば、津波で流された町にどんな新しいものを持ち込もうかと考える。しかし、工藤さんはあえて昔からあって、津波にも負けなかった樁で町おこしを始めている。町の自然、歴史、文化を残したいと話の所々で言っていた工藤さんの熱い思いが込められているのだろう。おこがましい考えであるとは分かっているが、南三陸町を作るのは南三陸町の人々だと思わざるを得なかった。

学生L

自分の街や大事な人たちが、同じ境遇になってしまったらと思うと恐怖してしまう中、対照的に「少し先の未来」について語る南三陸の人々の姿勢に気づいた。「命をあきらめないでほしい」「(福祉モールができるから) 2年後、来てごらん」「人が好きになると愛着がわいてきて、そして南三陸が好きになっていった」など、自身の経験を語った後には必ず「少し先の未来」について語っていたのだ。

この二人は、南三陸町の人々の復興に対する力強さに希望を見出したようである。学生Kは、震災で崩壊してしまった町を、住民が率先して復興に当たる姿勢に強い印象を受けている。また、これまで南三陸町にあった自然や歴史、文化を残したいという町の人々の思いを強く受け止めている。学生Lは、自分の住む町と南三陸町とを直線で結び、被災した地域が自分の町であったら、と想像する。しかし同時に、南三陸町の人々の未来を語る姿勢、その力強さに着目している。

5. おわりに

震災直後は、瓦礫撤去など、目に見える問題が山積みとなっていたため、必要とされる支援が明確であった。しかし、時間の経過とともに、そのような課題は少なくなってきている。ところが、実際に現地へ行き、地元の方の生の声に接したことで、コミュニティ維持の必要性など、目に見えない問題、必要とされる支援がまだまだたくさん複雑に絡み合っており存在していることに気づくことができた。こういったことから、学生達は被災地にはまだまだ支援が必要であるが、現地が何を求めているのかを知るためには、自分たちの足で現地へ行き、探し出す活動が何よりも大切だと考えるに至ったのである。

以上のように見てみると、復興支援はその段階によって様々な形で支援がなされるべきであるということを学生は知ったようである。さらに、南三陸町に関しては震災以前より過疎化の進んでいた地域であったため、今回の震災により人口の減少が加速してしまった。そのため、地域支援と位置づけた場合、そもそもどこまでが復興支援でどこからが地域創成なのか明確に区分しにくいということも知り得たようである。このような結果からも、こういった地方に生きる方々に直接触れることは学生にとって非常に大きな学びの機会となっているといえよう。

被災地ボランティアは、必ずしも学生の学修機会としてのみあるわけではないが、少なくとも活動後のアンケートやレポートからは、学生が活動に意義を感じていることが明らかになった。こういった活動は、今後の大学における新しい学修機会として企画・運営されていくことになるだろう。今後も、より多くの学生にこういった企画に参加し、成長して欲しいと願ってやまない。

※筆者の引率したActの参考図書として、磯田道史『天災から日本史を読み直す－先人に学ぶ防災－』（中公新書、2014年）を挙げた。

The Growth Potential of the Student through the Study Tour —In Case of Tohoku Area Reproduction " Network of the Private University 36"—

SUZUKI Takayoshi

Abstract : This paper describes Tohoku Area Reproduction “Network of the Private Universities 36” , a project aiming to support and revitalize East Japan after a great earthquake, focusing on the growth of the students who participated in it. The project enabled students to learn the current situation of the disaster-stricken area based on the theme of ‘Act’ , a four day field trip to Minami-Sanriku in Tohoku. In September 2015, the present author led students to Minami-Sanriku, where they earnestly tried to think in depth, exchanged opinions with each other, and drew conclusions by themselves during the four days of ‘Act’ . Although supporting the reconstruction of Tohoku is a big attempt and students can do only a little for it, the author has come to recognize in this trip that there might be some support activities only students can do, through which they can improve further. To sum up, reporting on the case of ‘Act’ , this paper examines what lessons the students have actually learnt from the project and how much potential they have had to develop as a person.

Keywords : Study tour Student volunteer activity ; East Japan great earthquake disaster ; Reconstruction aid Tohoku area reproduction "Network of the private university 36"